

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	當座探題：文苑
Author(s)	稼堂；桃江；錦山；眞榮；孝；蘆月；破村；基紀；鉄州；芝峯
Citation	龍南會雜誌， 6 9： 4 7 - 4 9
Issue date	1898-12-24
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5192
Right	

かばしては家つとせん賤か屋の垣根にさける菊の一本
 賤かやのまかきの菊の花もたゝ今日の盛をそへんどや咲く
 玄のかなる浮世の外の賤家をひどりしめたる菊の花かな
 玄つかやの垣根の菊もかをるなり君か惠の露のあまねく
 すぢかては誰にか見よと玄つか家の垣根に向ふ白菊の花
 人遠き庭に向へる白菊やこの世の外の色は見えたる
 賤男かすつるかさねのちりひちを色にかくせり白菊の花

郭外冬眺(全)

託麻野の一面あすはきちちかかれて日影さひしき冬はきにけり
 飛鳥のねくらにかえる音もたむて眺さひまき冬の夕くれ
 たゝに守るかき玄の外に人もなま山家も今や冬は知るらむ
 霜かれし杜の梢水日は落て鳥の音さひまき託麻野の原
 吹さすはふ風に散行く木葉の葉の軒端にふかき冬の夕くれ
 木枯の風に草木もかれはてゝ人めまれなる冬の夕くれ
 木枯の吹さゆゝのらを來て見ればなへてふするの床どこ見れ

當座探題

想の漣のさへ憂喜俄人々ささすもささすも風の上斗く

文苑

椽堂先生

四十七

眞榮 孝州 鉄 基 寄 熊 月 蘆 奇 熊 鉄 州 蘆 月 基 紀 村 破 孝 桃 江

秋の野のをみぞへしにならひそよふすもなひくも風のまに

松間紅葉

木枯のふくをまつまの夕紅葉散るぬ先よりをまされにけり

本館の相あひし

本館の風草山居述懐

ぬらちには訪ふ人もかな落葉ふくぬるまはしき山下の庵

在ひとさけ柴の庵の青のふらくる人もなし片山の里

かたききと夢も結はぬ深山路の袖にもすむか有明の月

筋根路やさゆる霜夜に夢さめて有明かたの月を見る哉

世路如夢

夢ぬれやさのふの備も今日の瀬どかはりにかはるけふの世の中

人面も鏡も紅葉如錦

袖木なる賤靴もかぬ秋のみは紅葉の錦きぬ時そなき

夕かけぬれも出て歸る蛋の舟はやくもさすや夕月の影

秋の面水大和のまはる花は映水

秋の面水大和のまはる花は映水

桃江

錦山

眞榮

孝

蘆明

孝村

辞家見月幾回圓

故郷を立いてしより幾度か月の姿のまどかなる見る
望月の影見る毎に思ふかな故郷出て幾日經にけむ
月影も共に流れて秋の夜のなかつきせぬ水の面かな
不知秋思在誰家

基 紀
鉄 州
芝 峯

夜もすがら誰れ秋風を身にまめて衣打つらむ玉川の里
誰家に砧うつらむさらたにかなしきものを秋の夜なく
さなきたに淋えきものを雁の聲さくにえたへぬ獨寐の床
山松の音にかよひて聞ゆなり月にすみゆく笛の二聲
秋の夜の光くまなき月の夜は笛の聲さへすみて聞ゆる

雜 立 歌

いたつらにふけぬ身をは秋の夜の月にうつしてかこちぬる哉

紅葉

江 陽